年号	年譜
昭和2年 一九二七	1月5日、村上三好、タマカの長男として生まれる。出生地は母の実家、岩手県東磐井郡大原町字清水田（すがた）一八番地（現在の同郡大東町）。戸籍上の出身地は父の実家、気仙郡矢作（やはぎ）村諏訪四一（現在の陸前高田市矢作町）。
昭和3年 一九二八 1歳	7月13日、父、一関区裁判所藤沢出張所長として赴任。一家は、岩手県東磐井郡藤沢町藤沢字町裏二一〇番地三に転居。
昭和4年 一九二九 2歳	8月、弟・和夫（次男）出生。
昭和7年 一九三二 5歳	7月、弟・貞夫（三男）出生。
昭和8年 一九三三 6歳	東磐井郡藤沢町立藤沢尋常小学校に入学。在学時代は格別目立つ存在ではなかったが、おとなしくて作文が上手だった。父に火箸で叩かれながら勉強したが、勉強はそれほど好きではなく、成績は中位だった。
昭和10年 一九三五	3月、弟・達夫（四男）出生。達夫をおぶって酒を買いに行ったことを学校の作文に書

8歳

き、醤油を買いに行けと言ったはずだと父に叱られた。

7月31日、父、遠野区裁判所盛出張所長として転任。気仙郡盛町字舘下九番地の四（後、大船渡市となる）に転居、盛町立盛尋常小学校第三学年に編入。

昭和14年
一九三九
12歳

3月、盛町立盛尋常小学校を卒業。

4月、盛岡市仁王田甫の私立岩手中学校（現在、盛岡市長田町七―八〇私立岩手高等学校）に入学。同市仁王小路（番地不詳）佐々木守彦方に下宿する。入学まもなく、牟岐喆雄（詩人・北川れいの父）が受持つ漢文の授業で、生徒に「釈迦は生まれたとき何と言ったか」と質問したところ、皆黙っていたので思いきって「天上天下唯我独尊」と答えた。中学時代は剣道部に所属し、寒稽古は欠かさなかった。岩手登山を毎年続けた。

昭和16年
一九四一
14歳

1月、弟・成夫（しげお）（五男）出生。

3月、父、盛岡区裁判所に転任し、盛岡市加賀野中道二七番地に転居。佐々木宅の下宿をひきはらい同居。

夏、パラチフスにかかり三ヵ月休学、一年の留年となる。

昭和17年
一九四二
15歳

学徒動員により約一年間横浜市の軍需工場へ行く。川崎市の「紫雲寮」に寄宿。

昭和19年
一九四四
17歳

年号	年譜
昭和20年 一九四五 18歳	3月、岩手中学校を卒業。満州国濱江省（当時）官吏に採用され、直ちに大陸に渡る。赴任した濱江省の上長は、なにくれと仕事を教えてくれる朝鮮半島系の人だったが、課長は彼を人間扱いしなかった。哈爾濱市馬家区巴陵街七六・濱江寮に住む。のち航空機工場に挺身隊として入り、さらに臨時召集兵となり入隊。見送りの誰もいない出征に悲しくて涙が出たと後に母親に語っている。 8月、妹・睦子（長女）出生。 8月15日、太平洋戦争終戦、拳銃所持の疑いでソ連軍に連行される。取り調べの際に煙草の火をおしつけられるなどしたが、第三者の証言により釈放。（シベリアで抑留され俘虜生活を送ったとも言われているが、詳細は不明。）終戦から帰国するまでの間に中国や朝鮮半島の人達の多くの親切に助けられ、それが生涯忘れられないこととなった。
昭和21年 一九四六 19歳	春、父が盛岡区裁判所を辞職。 秋、帰国。家族は昭夫がもうこの世にいないものとすっかり諦めていた。
昭和22年 一九四七 20歳	1月28日、盛岡郵便局事務員に採用される。 春、岩手青年師範学校に合格したが、弟たちの進学のため入学を断念。 父、矢作に帰郷、村助役を半年ばかり勤める。

昭和23年
一九四八
21歳

父、早春に東北電力に入社。
9月30日、盛岡郵便局郵政事務官となる。職場の混声合唱団・交声会のリーダーになったり、機関誌の編集をしたりして、文化活動に活躍（25年の春まで）。大陸での生活を題材にした小説も書く。また、郵便局勤務時代にラジオののど自慢大会に出場、〈異国の丘〉を歌いかねを三つ鳴らした。

昭和24年
一九四九
22歳

☆小説〈浮情　第一回〉（「意吹」?月）
☆小説〈腕　第一回〉（「全逓盛郵」一三号・7月）
☆〈母〉（「意吹」五号・7月）
☆〈弟よ〉（同右）
☆小説〈浮情　第二回〉（同右）
☆〈友に捧ぐ〉（「意吹」六号・8月）
☆小説〈浮情　第三回〉（同右）
☆小説〈腕　第二回〉（「全逓盛郵」一四号・8月）

昭和25年
一九五〇
23歳

春、結核発病。引揚げ時の相当の無理が病気の因をなしたと思われる。入院したくともベッドが空かない時代だったので自宅療養をする。
6月頃、映画「きけわだつみの声」を見る。画面に挿入された宮沢賢治の「あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません。」（童話集『注文の多い料理店』収録の「烏の北斗七星」の中の、烏の大尉の言葉）に感動した。
秋、盛岡市下米内の岩手医科大学付属岩手サナトリウムに入院。

年号	年譜	著作
昭和26年 一九五一 24歳	2月、岩手サナトリウム内の大部屋（一九人室）に入る。院内回覧俳誌「青空」に投句。 「季刊岩手俳句」に一句収録。高村光太郎の詩〈鈍牛の言葉〉から採った〝鈍牛（どんぎゅう）〟の俳号を用い、サナトリウムでは皆から〝鈍牛さん〟の愛称で親しまれる。 7月、詩誌「首輪」（和賀郡黒沢尻町清水小路斎藤方）創刊。 7月、同サナトリウムに入院してきた高橋昭八郎と知り合う。高橋の紹介により首輪の会同人となる（二号から）。 10月、左胸郭成形手術、経過良好。手術中に口笛を吹き執刀医に尻を叩かれた。	☆〈からす〉（「首輪」二号・10月） ☆〈弟よ〉（「療友詩歌集」一号・夏） ☆〈サナトリウム〉（同右） ☆〈弟よ〉（「光」9月） ☆〈ラリックス〉（同右） ☆〈父に〉（同右）
昭和27年 一九五二 25歳	院内俳誌「草笛」が宮野小提灯、田村了咲の指導で発刊（浅沼弘一編集）。草笛句会に入会し投句する。句会仲間で重症患者の昆ふさ子と親しくなる（後に結婚）。	☆〈えへらえへら→**大人のための童話**〉（「光」3月） ☆〈A君へ〉（同右） ☆〈笑いについて→**ある笑いについて**〉（「首輪」四号・6月） ☆〈**母について**〉（「首輪」五号・12月） ☆〝たより〟（同右／書簡掲載）
昭和28年 一九五三 26歳	2月、病気軽快となり岩手サナトリウムを退院。盛岡市加賀野中道二七の自宅に帰る。まだ闘病中の昆ふさ子を見舞い励ます。 5月19日、「岩手日報」学芸欄に「日報文芸」（詩の選者・草野心平）が設けられ投稿をはじめる。翌年8月27日、選者が村野四郎に変わり、晩年まで投稿を続ける。才能を認められ、村野四郎を終生の師として仰ぐ。 10月、第七回岩手芸術祭詩の部門で〈荒野と	☆〈**ある音について**〉（「岩手日報」5月19日） ☆〈砂丘の歌→**砂丘のうた**〉（「岩手日報」7月28日） ☆〈**荒野とポプラ**〉（第七回岩手芸術祭入選／「岩手日報」10月15日） ☆〈ドン・コサック→**ソヴエット・ロシヤ**〉（「首輪」七号・12月） ☆〝「首輪」をどうすべきか・われわれのアンケート〟回答（同右）

年号	年譜	著作
昭和26年 一九五一 24歳	2月、岩手サナトリウム内の大部屋（一九人室）に入る。院内回覧俳誌「青空」に投句。「季刊岩手俳句」に一句収録。高村光太郎の詩〈鈍牛の言葉〉から採った〝鈍牛（どんぎゅう）〟の俳号を用い、サナトリウムでは皆から〝鈍牛さん〟の愛称で親しまれる。 7月、詩誌「首輪」（和賀郡黒沢尻町清水小路斎藤方）創刊。 7月、同サナトリウムに入院してきた高橋昭八郎と知り合う。高橋の紹介により首輪の会同人となる（二号から）。 10月、左胸郭成形手術、経過良好。手術中に口笛を吹き執刀医に尻を叩かれた。	☆〈からす〉（「首輪」二号・10月） ☆〈弟よ〉（「療友詩歌集」一号・夏） ☆〈サナトリウム〉（同右） ☆〈弟よ〉（「光」9月） ☆〈ラリックス〉（同右） ☆〈父に〉（同右）
昭和27年 一九五二 25歳	院内俳誌「草笛」が宮野小提灯、田村了咲の指導で発刊（浅沼弘一編集）。草笛句会に入会し投句する。句会仲間で重症患者の昆ふさ子と親しくなる（後に結婚）。	☆〈えへらえへら→**大人のための童話**〉（「光」3月） ☆〈A君へ〉（同右） ☆〈笑いについて→**ある笑いについて**〉（「首輪」四号・6月） ☆〈**母について**〉（「首輪」五号・12月） ☆〝たより〟（同右／書簡掲載）
昭和28年 一九五三 26歳	2月、病気軽快となり岩手サナトリウムを退院。盛岡市加賀野中道二七の自宅に帰る。まだ闘病中の昆ふさ子を見舞い励ます。 5月19日、「岩手日報」学芸欄に「日報文芸」（詩の選者・草野心平）が設けられ投稿をはじめる。翌年8月27日、選者が村野四郎に変わり、晩年まで投稿を続ける。才能を認められ、村野四郎を終生の師として仰ぐ。 10月、第七回岩手芸術祭詩の部門で〈荒野と	☆〈**ある音について**〉（「岩手日報」5月19日） ☆〈砂丘の歌→**砂丘のうた**〉（「岩手日報」7月28日） ☆〈**荒野とポプラ**〉（第七回岩手芸術祭入選／「岩手日報」10月15日） ☆〈ドン・コサック→**ソヴエット・ロシヤ**〉（「首輪」七号・12月） ☆〝「首輪」をどうすべきか・われわれのアンケート〟回答（同右）

ポプラ〉第一席入賞。

昭和29年
一九五四
27歳

2月28日、岩手県詩人クラブが盛岡市内丸の岩手県立図書館において結成され、会員となる。会長・佐伯郁郎、事務局長・大坪孝二。

昭和30年
一九五五
28歳

3月31日、「願いにより」盛岡郵便局郵政事務官を免ぜられる。病気休職から免職、この冷厳な事態に直面し激しいショックを受けた。近くの岩山に登って逍遙する。
盛岡俳句研究会（吉田梧郎宅）に高橋青湖、山田蘭汀、伊藤トキノ、村谷龍四郎らとともに参加。

昭和31年
一九五六
29歳

三八城文彦の「日本詩潮」（青森市）に参加。
2月、岩手県詩人クラブ機関誌「皿」第五号の特集アンケート「一九五五年の暮に思う」で、①今年のあなたの仕事は（無回答）、②尊敬している詩人＝宮沢賢治、③今年注目した詩人＝ボンヤリしていたので分りません。④今読んでいる本＝サマザマな童話です、と答える。
3月16日、詩誌「首輪」第一一号の合評会が盛岡市の大坪宅で開かれ出席。その後「首輪」の続刊を南川比呂史、斎藤彰吾らと企図した

☆〈月光と犬〉（「東北文庫」六八号・1月）
☆〈**かたい川**〉（「首輪」八号・6月）
☆〈**五億年**〉（「岩手日報」2月16日）
☆〈**化石した牛**〉（「岩手日報」2月23日）
☆〈雪の歌→**雪**〉（「東北文庫」七五号・4月）
☆〈**星を見ていると**〉（「岩手日報」5月3日）
☆〈**破戒の日**〉（副題…仏陀はまだ比較的若かった／「岩手日報」5月13日）
☆〈**兄弟**〉（「首輪」一〇号・5月）
☆〈悲歌→**遠い道**〉（「岩手日報」6月3日）
☆〈仏陀を描こう→**仏陀を書こう**〉（「岩手日報」6月21日）
☆〈乞食と布施と→**乞食と布施**〉（「岩手日報」6月30日）
☆〈**一本足の廃兵**〉（「岩手日報」7月6日）
☆〈**賢治の星**〉（「岩手日報」9月1日）
☆〈**靴の音**〉（「岩手日報」11月12日）
★〈**化石した牛**〉（「日本詩潮」八号・1月）
☆〈**シリウスが見える**〉（「岩手日報」1月19日）
☆〝一九五五年の暮に思うアンケート〟回答（「皿」五号・2月）
☆〈坂を登る馬→**坂をのぼる馬**〉（「岩手日報」2月16日）
★〈枯野→**破戒の日**〉（「首輪」一一号・3月）
☆〈**つながれた象**〉…（同右）
☆書簡抜粋（通信欄〝風〟）（同右）
★〈五億年の時→**五億年**〉（「日本詩潮」九号・

年号	年譜	著作
	が、無期休刊することになる。 3月15日、宮沢賢治をたずねる会に参加。花巻市の賢治生家で、原稿を見、〈雨ニモマケズ〉の詩碑、イギリス海岸付近を散策。 4月26日、高村光太郎を偲ぶ夕で、講演と詩朗読の会が盛岡市内丸の町村会館（今の岩手県自治会館）で開かれ、追悼詩〈長靴をはいて〉を朗読。講師・堀江赴、森荘已池、佐藤勝治。 6月22日～24日、三日間、岩手県立図書館ホールで開かれた第一回詩展に、〈一本足の廃兵〉を出品。 10月13日、岩手芸術祭第一回詩祭が盛岡市教育会館で開かれ〈賢治の星〉を朗読。〈おかあさん聞かして下さい〉が入選。（講師・佐伯郁郎、及川均、山本太郎） 12月、画家と詩人のグループ・アプレを結成し、盛岡市肴町ツキウギャラリィで詩画展を開く。〈荒野とポプラ〉他二篇を出品。この頃、〝クロ〟と名付けた野良犬とともに県営アパートに住む宮静枝を訪れる。何処にいくにも連れて歩いたこの犬について、後年「動物哀歌はクロに教えられて書いたようなもの」と語る。	3月） ★〈**かたい川**〉（「北の文学」二号・4月） ☆〈明（ママ）いている椅子→**あいている椅子**〉…（同右） ☆〈**海の向こう**〉（「岩手日報」4月15日） ☆〈**屠殺場にある道**〉（「岩手日報」4月18日） ☆〈**マンモスの背**〉（「岩手日報」5月23日） ☆〈**蛇**〉（「岩手日報」5月30日） ＊〈神様について→**神様**〉（6月20日、盛岡詩の会合評会提出） ★〈**一本足の廃兵**〉（6月22日、第一回詩展に出品、作品集あり） ★〈**賢治の星**〉（「日本詩潮」一一号・7月） ☆〈**月から渡ってくる船**〉（「岩手日報」9月1日） ☆〈**精霊船**〉（「岩手日報」9月7日） ☆〈お母さん聞かして下さい→**お母さん**〉（岩手芸術祭第一回詩祭入選、入選作品集あり／「岩手日報」10月8日） ☆〈**悲しみを覗く**〉（「岩手日報」10月11日） ☆〈去ってゆく仏陀→**去って行く仏陀**〉（「岩手日報」11月5日夕刊） ☆〈**金色の鹿**〉（「岩手日報」11月26日夕刊） ☆〈**誰かが言ったに違いない**〉（「岩手日報」12月3日夕刊／11月18日、盛岡詩の会合評会提出） ☆〈**出家する**〉（「岩手日報」12月13日夕刊／11月18日、盛岡詩の会合評会提出） ★〈**荒野とポプラ**〉（12月14日、アプレ〝詩と絵の展覧会〟に出品） ☆〈紅色の林檎→**紅色のりんご**〉（同右／詩集所収の（1）か（2）か不明）

昭和32年
一九五七
30歳

1月、岩手県詩人クラブの幹事となり、機関誌「皿」の編集を担当。13日、大坪孝二詩集『地図』の出版記念会が盛岡市の多賀園で開かれ出席。

3月、「皿」第六号を編集発行。以後34年1月まで誌面に新しい企画をとり入れ、充実した機関誌活動を行う。またこの頃、毎月開かれる盛岡詩の会合評会に欠かさず出かけ、大坪夫妻の世話になる。

4月21日、盛岡市内詩人有志による春のハイキングがあり、国鉄の合唱団員でもある米内貞二と二部合唱をする。報恩寺、五百羅漢、岩手産業文化館(現在の郷土史料館)、愛宕山、高松の池などをめぐり佐伯郁郎宅を訪れ解散。

8月3日、盛岡ホテルにきている韓国の詩人・金素雲を、盛岡の仲間と訪ねる。金素雲が朗読してくれた李光沫の詩〈御身〉に深い感銘を受ける。

10月8日、第二回詩祭「現代詩の講演と詩劇の夕べ」が教育会館で開かれ、上演された二つの詩劇のうち盛岡組の〈馬を主題とする三つのファンタジィ〉(作・構成・藤井逸郎、吉田慶治、大坪孝二、演出・佐伯郁郎、栗栖保之助、装置・村上善男)に出演、高原Aとアングロアラブの二役を兼ねる。稽古中セリフの覚えが悪く皆をひやひやさせたが、本番となるや見違えるほど流暢でプロンプターの佐藤章さえ驚くほどであった。北上、花巻組は〈黒のタンタルス〉(作・首輪太郎、演出・大村孝子、装置・大宮政郎)。講師・江間章子、秋谷豊。詩祭では〈航海を祈る〉が入選。

☆〈**石の上を歩く蚯蚓**〉(同右)

☆〈薔薇色の雲の見える山→**バラ色の雲の見える山**〉(「岩手日報」1月1日・新年文芸〝天・地・人〟の〝地〟位)

☆〈**それが天なのだ**〉(「岩手日報」1月14日夕刊)

☆〈**人は山を越える**〉(「岩手日報」3月26日夕刊)

☆俳句作品評〈習作研討〉(「草笛」七〇号・3月)

＊〈僕はその人と対決する→?**ぼくはそれと対決する**〉(「岩手日報」5月7日夕刊・選外＝作品無掲載)

＊〈**紅色の林檎**〉(「岩手日報」5月17日夕刊・選外＝作品無掲載／詩集所収の(1)か(2)か不明／村上昭文[ママ])

☆〈**私をうらぎるな**〉(「岩手日報」6月14日夕刊)

☆〈**豚**〉(「岩手日報」6月24日夕刊)

＊〈其処を行く〉(「岩手日報」7月30日夕刊・選外＝作品無掲載／村上昭文[ママ])

☆〈小さな涙の歌→**ふと涙がこぼれる**〉(『岩手放送詩集』・県詩人クラブ刊・8月)

★〈**精霊船**〉(同右)

☆文〈「中村俊亮」の詩をめぐって〉(「岩手日報」9月3日夕刊)

☆〈橋を渡る兄弟〉(「岩手日報」10月1日夕刊)

＊〈車をひく人〉(「岩手日報」10月29日夕刊・選外＝作品無掲載／村上昭文[ママ])

☆〈**愛さなければならない**〉(「白塔」二二号・10月)

年号	年譜	著作
昭和33年 一九五八 31歳	3月から9月頃にかけて、盛岡市志家（しけ）の川村内科医院に通院。 5月27日、宮静枝、阿部れい子の誕生会に招かれ、岩山で遊ぶ。 6月15日、ラジオ岩手で開かれた第二回ラジオドラマ研究会に参加したが、途中で大村孝子、中村俊亮らと岩手公園に行き詩を語り合う。この頃、盛岡詩の会の活動は、固定化を理由に中止。 8月、盆踊りに熱中、ゆかたを着て一週間踊りつづけたが、ついに物にならず。 9月、「皿」第一五号発行。〈座談会・現代詩をめぐって〉の司会を担当。21日、花巻市の賢治祭に岩手県詩人クラブの代表として大村孝子と参加。碑前で「稲作挿話」を朗読、大村はオルガンを伴奏。 10月15日、第三回詩祭「講演と詩劇の夕べ」が岩手教育会館ホールで開かれる。講師・村野四郎、木原孝一。入場券販売に奔走、雨に打たれ風邪をひく。 10月16日、盛岡市仁王新町の岩手郡教育会館で村野、木原両講師を迎え〈現代詩の座談会〉で司会をする。 10月17日、NHK盛岡放送局の座談会に前記講師、大坪孝二の四人で出席。 12月、「La」（盛岡市仁王新町一六二・大坪方、のち盛岡市中央通二丁目六―一八となる）五号から〈動物哀歌〉連作を開始。	☆〈**航海を祈る**〉（第一一回岩手芸術祭入選／「岩手日報」10月22日夕刊） ＊〈雪の降る音〉（「岩手日報」2月4日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈月の裏側〉（「岩手日報」3月4日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈星の話〉（「岩手日報」4月1日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈**宇宙を隠す野良犬**〉（「岩手日報」4月8日夕刊） ☆〈道→**悪い道**〉（「岩手日報」4月15日夕刊） ☆〈**引揚船**〉（「皿」一三号・5月） ☆〈宇宙について→**宇宙について(2)**〉…（同右） ＊〈**深海魚**〉（「岩手日報」5月20日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈愛する道〉（「岩手日報」7月8日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈**言葉について**〉（「岩手日報」7月29日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈猿→？**芝居をする猿に寄せて**〉（「岩手日報」8月5日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈**死んだ牛**〉（「岩手日報」8月12日夕刊） ☆文〈『榛の木と夜明け』に寄せて〉（「La」別冊・『榛の木と夜明け』特集・8月） ☆俳句〈列車の笛・一五句〉（『草笛集―草笛作品集第一輯』・草笛発行所刊・8月） ＊〈**黒豹**〉（「岩手日報」8月19日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈**女が裸になる前に**〉（「岩手日報」8月26

昭和34年
一九五九
32歳

1月、レントゲン検査の結果、前に成形手術していなかった右肺に空洞ができていた。手術を覚悟し、安静自重を期するため詩人クラブの仕事から手を引く。
月末に「皿」第一七号の編集を終える。
5月、仙台市北四番丁六四の仙台厚生病院に入院。

日夕刊・選外＝作品無掲載）
☆座談会〈現代詩をめぐって（司会・昭夫、出席・内川吉男、大村孝子、高橋昭八郎、中村俊亮）〉（「皿」一五号・9月）
＊〈**ひとでのある所**〉（「岩手日報」10月2日夕刊・選外＝作品無掲載）
☆〈**太陽にいるとんぼ**〉（「岩手日報」10月28日夕刊）
＊〈**巨象ザンバ**〉（「岩手日報」11月4日夕刊・選外＝作品無掲載）
＊〈**タクラマカン砂漠**〉（「岩手日報」11月25日夕刊・選外＝作品無掲載）
＊〈**荒野**〉（「岩手日報」12月16日夕刊・選外＝作品無掲載）
☆〈動物哀歌〉（「La」五号・12月）
★序曲→屠殺場にある道
☆**空を渡る野犬**
★化石した牛
★坂を登る馬→**坂をのぼる馬**
★豚
★蛇
★マンモスの背
☆〈**アンドロメダ星雲**〉（「岩手日報」1月6日夕刊）
＊〈宇宙について→**?宇宙について(1)**〉（「岩手日報」1月13日夕刊・選外＝作品無掲載）
＊〈**熊のなかで**〉（「岩手日報」1月20日夕刊・選外＝作品無掲載）
☆〈**野の兎**〉（「岩手日報」1月27日夕刊）
＊〈**其処**〉（「岩手日報」2月3日夕刊・選外＝作品無掲載）
＊〈熊の中の星→**熊のなかの星**〉（「岩手日報」

年号	年譜	著作
		2月17日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈**あざらしのいる海**〉（「岩手日報」3月17日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈ねずみ〉（『動物哀歌』所載の〈ねずみ〉とは別作／「岩手日報」3月31日夕刊） ＊〈**如来寿量品**〉（「岩手日報」4月14日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈**人**〉（「岩手日報」4月21日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈**女人**〉（「岩手日報」4月28日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈動物哀歌 二〉（「La」六号・5月） **★宇宙を隠す野良犬** ☆猿→**芝居をする猿に寄せて** **★野の兎** ☆**ひとでのある所** ☆〈**荒野**〉（「皿」一八号） ☆〈**男**〉（文芸欄〝詩とデッサン〟に舞田文雄の絵とともに／「岩手日報」5月12日夕刊） ☆〈**雁の声**〉（「岩手日報」5月26日夕刊） ＊〈**ひとつの星**〉（「岩手日報」6月2日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈**すずめ**〉（「岩手日報」6月23日夕刊） ＊〈**宇宙の話**〉（「岩手日報」7月14日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈**うみねこ**〉（「岩手日報」7月28日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈月の裏側〉（「原点」一号・8月） ＊〈**世界**〉（「岩手日報」9月8日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈**死と滅び**〉（「岩手日報」10月6日夕刊）

昭和35年
一九六〇
33歳

父、東北電力退職。
院内で開かれる聖書研究会に出席。
9月、村上家、盛岡市下厨川字赤褄五九番地五（現在の西青山一丁目八番地一一）に愛犬クロを連れて転居。クロは一夜だけ泊まって加賀野の旧居に帰る。退院後の昭夫の仕事への配慮もあって、同所で公衆浴場〝玉の湯〟を開業。

＊〈**もっと静かに**〉（「岩手日報」11月3日夕刊・選外＝作品無掲載）
☆〈**こおろぎのいる部屋**〉（「岩手日報」12月1日夕刊）
＊〈**実験される犬**〉（「岩手日報」12月8日夕刊・選外＝作品無掲載）
＊〈**兎**〉（「岩手日報」1月1日・新年文芸佳作＝作品無掲載）
☆〈**樫の木**〉（「岩手日報」1月5日夕刊）
☆〈**病い**〉（「岩手日報」1月19日夕刊）
☆〈**じゅうしまつ**〉（「岩手日報」3月8日夕刊）
☆〈動物哀歌 三〉（「La′」七号・4月）
★こおろぎのいる部屋
☆**人**
★ねずみ（34年3月「岩手日報」初出）
☆**うみねこ**
☆**あざらしのいる海**
☆〈**五月は私の時**〉（「岩手日報」5月24日夕刊）
＊〈**鴉**〉（「岩手日報」5月31日夕刊・選外＝作品無掲載）
＊〈木蓮→**?木蓮の花**〉（「岩手日報」6月28日夕刊・選外＝作品無掲載／村上照夫（ママ））
☆〈**都会の牛**〉（「岩手日報」7月5日夕刊）
☆〈動物哀歌 四〉（「La′」八号・9月）
★じゅうしまつ
★すずめ
☆からす→**鴉**
★雁の声
☆〈**熱帯鳥**〉…「無限」六号・12月

年号	年譜	著作
昭和36年 一九六一 34歳	9月、右肺葉切除手術をする。経過悪く苦しんだ。肺活量少なくあと五年位しか生きられないと言われる。あまたの詩も、聖書、法華経も死の恐怖を救ってくれず、ただ般若心経だけが心の支えとなる。	☆〈**リス**〉（「岩手日報」1月10日夕刊） ☆〈**鳩**〉（「岩手日報」1月17日夕刊） ☆〈**ひき蛙**〉（「岩手日報」6月20日夕刊）
昭和37年 一九六二 35歳		☆〈**おおそれはそれは**〉（「岩手日報」5月1日夕刊） ☆短評〝アルペジオ〟（「Lasen」一一号・12月／同誌一号の誌評）
昭和38年 一九六三 36歳	8月、仙台厚生病院を退院。三年間の闘病生活を終え帰宅。〈動物哀歌〉連作の契機となった愛犬クロが死ぬ。 9月22日、大坪宅で開かれた詩人クラブの会合に出席、クラブの面々と久しぶりに懇談。両親への感謝をこめて家業の浴場業務に精を出す。	＊〈**土よりも深い苦悩を**〉（「岩手日報」1月1日・新年文芸佳作＝作品無掲載） ☆〈**終りに**〉（「無限」一三号・6月） ＊〈**李珍宇**〉（「岩手日報」6月24日夕刊・選外＝作品無掲載） ＊〈びっこの犬〉（「岩手日報」7月29日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〈**エル**〉（「岩手日報」8月19日夕刊）
昭和39年 一九六四 37歳	1月1日、〈道〉が「岩手日報」新年文芸の天賞を受賞。 10月25日、第一八回岩手芸術祭詩の会で〈駱駝〉が入選。 10月、浴場で仕事中、滑って転び肩を脱臼。	☆〈**道**〉（「岩手日報」1月1日・新年文芸〝天・地・人〟の〝天〟賞） ＊〈**秋田街道**〉（同右選外＝作品無掲載） ☆〈一番星―二番星はどんな星（ママ）→**一番星―一番星はどんな星**〉（「皿」三〇号・2月） ☆〈**秋田街道**〉（「無限」一六号・8月） ＊〈唯ひとつの願い→**ただひとつの願い**〉（「岩手日報」8月24日夕刊・選外＝作品無掲載） ☆〝詩人クラブ一〇周年記念アンケート〟回答（「皿」三一号・9月） ☆〈**駱駝**〉（10月25日、第一八回岩手芸術祭入

昭和40年
一九六五
38歳

1月1日、〈氷原の町〉が「岩手日報」新年文芸の天賞を受賞。
3月、盛岡市青山一丁目二五番地の国立盛岡療養所に入院。結核、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胆嚢炎、悪性の貧血がカルテに書かれていた。入院中に原稿五〇〇枚ほどを整理する。
7月10日、国立盛岡療養所を退院。一週に三度通院。
冬、また体に変調をきたす。

☆〈**氷原の町**〉（「岩手日報」1月1日・新年文芸〝天・地・人〟の〝天〟賞）
＊〈**愛の人**〉（同右佳作＝作品無掲載）
☆〈**鶴**〉（「鞍」一号・4月）
☆〈**神**〉（「岩手日報」9月13日夕刊）
＊〈**宇宙を信ずべきか**〉（同右・選外＝作品無掲載）
☆〈**蔦の舞う空の下で**〉（10月10日、第一九回岩手芸術祭佳作／入選作品集あり）

昭和41年
一九六六
39歳

1月、松の内に大坪宅を訪問。大坪孝二と酒をのみながら、詩は生きるためのチリほどにも頼りにならないと語る。大坪から詩集を出すようすすめられる。
春、浴場を清掃中に再び倒れ、歩行不能となる。
10月9日、第二〇回岩手芸術祭詩の会が盛岡市内丸の県自治会館で開かれ、応募作〈狼〉が入選。病状悪く、弟の成夫が代理出席する。
10月10日、宮静枝が詩集発刊のことで訪ねてくる。これまで幾度か促されたが、療養費などに迷惑をかけてきたことを理由に断ってきた。しかし宮の懇望に両親も賛成し発刊を決意。次の日曜日、宮静枝、大坪孝二が訪問。二人に、ダンボール箱にはいっている全原稿を渡し一切を委せる。詩集の題名を『動物哀歌』にきめる。

☆〈深い雪の中で〉（「岩手日報」1月1日・新年文芸佳作）
★〈安全なる航海を祈る→**航海を祈る**〉（「無限」二〇号・5月）
☆〈**エリス・ヤポニクス**〉（同右）
☆〈**スクリュウという蛇**〉（「鞍」七号）
☆〈**狼**〉（「皿」四八号・第二〇回岩手芸術祭詩の入選作品特集・12月）
☆〈**象**〉（10月9日、第二〇回岩手芸術祭選外）

昭和42年
一九六七
40歳

1月31日、かつての療友で俳句作家の昆ふさ子（北上市黒沢尻町字黒岩第一四地割二番地・昆精一郎長女）と結婚。

＊〈岩山〉（「岩手日報」1月1日・新年文芸入選＝作品無掲載）
☆文〈「死の眼鏡」を通して／晩翠賞受賞の記〉

年号	年譜	著作
	6月30日、再度国立盛岡療養所に入院。 7月中旬、院内を歩行ができ手紙も書けるようになる。家が近いので時々外出。日記、手紙類を焼却。 9月18日、詩集『動物哀歌』上梓（Lâ の会刊／一九五篇※収録。限定三〇〇部。序文・村野四郎、後記・大坪孝二、装幀および編集・高橋昭八郎） ※「紅色のリンゴ」（1）（2）を一つに数えると一九四篇 紀野一義、花巻の宮沢清六宅を訪問。村上の作品を紹介された。紀野から本を贈られ、交際がはじまる。 10月3日、村野四郎が陸前高田での講演に出向く途次、大坪孝二と高橋昭八郎の案内で国立盛岡療養所を見舞う。これが最後の師弟の対面となった。 10月19日、『動物哀歌』によって第八回土井晩翠賞（仙台市）受賞。授賞式には父、ふさ子、和夫が代理出席。 11月14日、晩翠賞受賞祝賀会、『動物哀歌』出版記念会が盛岡市ニューヤマトで開かれる。父、国立盛岡療養所長の石川義志、弟の貞夫、成夫に付添われて出席。席上、「肺病が癒ったら詩を書くことを止める」と語る。	（「岩手日報」10月25日夕刊） ☆〈李珍宇（ママ）〉（「西部評論」二号・12月／村上昭光）
昭和43年 一九六八 41歳	2月、気管支炎にかかる。 3月11日、日本現代詩人会のH氏賞選考委員会が東京新橋の蔵前工業会館で開かれ、一〇冊選ばれたうちの一冊に『動物哀歌』がはいる。26日、第二回選考委員会が同館で行われ、	★〈狼〉（「詩と批評」二四号・5月／同誌三一号・12月〝現代詩年鑑〟に再録） ☆随想〈星〉（岩手銀行広報誌「生活のしおり」二六号・6月） ☆〈捨てる〉（「無限」二四号・7月）

鈴木志郎康『罐製同棲又は陥穽への逃走』と『動物哀歌』に決定。その旨現代詩人会から連絡があり受諾。29日、同会の定例理事会で受賞者発表。

4月5日、NHKラジオ第一放送の〝時の人〟（午前7時47分～8時）に登場。動物に非常に関心を持ち、実際に動物の声がわかることなどを語る。

5月10日、東京新宿の紀伊国屋ホールで、第一八回H氏賞受賞記念「五月の詩祭」が開かれる。はじめ医師の許可を得て上京出席の予定だったが欠席し、代理に母、弟・和夫、妹・睦子が出席、弟・和夫が代って賞を受ける。地元の詩人からは、佐伯郁郎が参加。参集者の一人であった沢野起美子（岩手県和賀郡東和町出身）は、詩集『動物哀歌』がすでに絶版になっていたのを知り、その再出版を決意する。

詩誌「歴程」の例会で犬塚堯とともに同人に推挙され承諾（山本太郎の提案）。受賞のことが全国に伝わり、未知の人々から手紙が舞い込む。その返事書きに追われ、また未知の見舞い訪問客の応待があったりして疲労を覚えるようになる。そのため、手紙の返事は父が代筆した。

5月28日、詩人・及川均が国立盛岡療養所を見舞う。

6月、視力の減退を感じ、次第に眼が見えなくなり字も書けなくなった。

8月、詩集の再版が村野四郎の編集で東京の思潮社から出版されることになった。眼科医の診断を受けたが、視神経には異常がないということだった。

年号	年譜	著作
	10月10日、急変の知らせで、父をはじめ家族が駈けつけたが、すでに会話不能。ただ顔でうなずくだけだった。手を胸に組み合掌の姿をしていた。11日、午前6時57分、盛岡市青山一丁目二五番地の国立盛岡療養所西下病棟二号室で肺結核と肺性心の合併症、および永い闘病生活のため全身衰弱し永眠。 10月13日、盛岡市青山寺で告別式。墓所は岩手郡滝沢村滝沢の穴口公葬地（みたけ学園裏）。 11月1日、思潮社版『動物哀歌』刊。（初版より七七篇を村野四郎が抄出、序文および再版後記・村野四郎、後記・大坪孝二、装幀・石川勝） 11月2日、岩手県教育表彰（芸術・文化部門）受賞、父が代って出席。	☆〈ラリックス物語〉（「歴程」一二四号・1月／26年「光」9月号〈ラリックス〉の改作） ☆〈若い合唱〉（同右）
昭和44年 一九六九	1月、「歴程」一二四号で村上昭夫追悼特集が組まれる。 12月、「皿」四九号が村上昭夫追悼特集号として刊行される。	

年号	年譜
昭和45年 一九七〇	
昭和46年 一九七一	
昭和47年 一九七二	9月10日、『動物哀歌』新装再版（みちのく社刊／初版に斎藤彰吾編の年譜を加える） 10月、ＩＢＣラジオ〝おはようミセス〟で村上昭夫『動物哀歌』の特集が放送される。詩

朗読〈星を見ていると〉〈ひとつの星〉〈秋田街道〉ほか、昭夫の歌った石川啄木の歌〝東海の……〟と〝やはらかに……〟の録音テープが放送された（話・高橋昭八郎）。

10月24日、俳誌「草笛」創刊二〇周年記念大会が盛岡の亀井商店ホールで開催され、大坪孝二が〝村上昭夫論〟を講演。

昭和48年 一九七三

1月1日、ＩＢＣラジオ〝農家のみなさんへ〟で〝岩手の民話と村上昭夫の詩によるファンタジー・動物哀歌〟が放送される。詩朗読〈熊のなかの星〉〈教えておくれ〉。

4月、「北流」二号で村上昭夫特集が組まれる。

年号	年譜
昭和49年 一九七四	11月12日、第三回岩手教育芸術祭の作曲部門として、岩手作曲研究会の作品発表会が岩手教育会館で開かれ、独唱曲〝村上昭夫詩集より〟〈お母さん〉〈鴉の星〉（作曲・千葉了道、独唱・一條静子、伴奏・村田光弘）が発表される。 11月29日、〝嵐野英彦（作曲家）作品の夕〟が東京・青山タワーホールで開かれ、歌曲〝村上昭夫の詩による三つの歌〟〈夜の色〉〈爪を切る〉〈道〉（作曲・嵐野英彦、テノール・古沢泉、ピアノ・武田宏子）が演奏される。
昭和50年 一九七五	4月26日～30日、盛岡市立図書館にて村上昭夫展開催。 4月29日、同図書館わきに詩碑建立・除幕。作品〈私をうらぎるな〉（活字）、選・村野四郎、碑名・草野心平書、設計・大宮政郎。沢野起美子の尽力による。以後61年まで同月同日に市立図書館で〝村上昭夫を語る会〟を開く。 8月、「繭」で〝共同討究・村上昭夫のCOSMOS〟を組む。

10月21日、第一回盛岡音楽祭が岩手県民会館で開かれ、その第三部として組曲〈雁の声〉（構成・高橋昭八郎、作曲・箱石啓人）が演奏される。

昭和51年
一九七六

10月11日、盛岡市立図書館の婦人文学学級で大坪孝二が「村上昭夫のこと」と題して講演。

昭和53年
一九七八

昭和55年
一九八〇

年号	年譜
昭和56年 一九八一	
昭和57年 一九八二	10月、村上昭夫研究誌「雁の声」創刊（村上昭夫を読む会・北畑光男代表）。

昭和58年
一九八三

2月10日、『動物哀歌』新装再版（トリョーコム刊／年譜付、初版の二度目の再版）

昭和59年
一九八四

昭和60年
一九八五

6月2日、千葉了道作品演奏会（一條静子デビュー二〇周年記念）が岩手県民会館で開かれ、独唱曲〈鴉の星〉〈うた〉演奏。

年号	年譜
昭和61年 一九八六	11月15日、NHK第二放送「四季のうた」で山本太郎が〈秋〉〈雁の声〉〈こおろぎのいる部屋〉を朗読、鑑賞。
昭和62年 一九八七	4月20日～26日、盛岡の画家・金子正が『動物哀歌』に寄せて描いた詩画展を盛岡市立図書館で開催。最終日に高橋昭八郎が記念講演。 9月、CD「山崎一繁歌曲集・動物哀歌」が製作される。昭夫の作品からは〈すずめ〉〈ねずみ〉ほか九曲（ソプラノ・佐藤教子、ピアノ・美添奈美子）。 10月、盛岡市先人記念館が開館、村上昭夫を紹介するコーナーを設置。 10月27日～11月8日まで、大東町立図書館で〝村上昭夫展〟開催。
昭和63年 一九八八	
昭和64年	

平成元年
一九八九

平成2年
一九九〇

9月8日～10月7日、日本詩人クラブ創立四〇周年記念〝日本の現代詩展〟が日本現代詩歌文学館で開かれ、東北の詩人コーナーにて村上昭夫を紹介。

10月7日、岐阜県上石津町で〝スインク90・詩の朗読の午後〟が開催され、和田久子・田中岸子が〈教えておくれ〉を朗読。

年号	年譜
平成3年 一九九一	3月2日、東京・渋谷で開かれた蝮（けら）の会例会で菊田守が「村上昭夫の詩の世界」と題して講演。
平成4年 一九九二	2月12日、日本テレビ〝ズームイン朝〟の〝朝の詩（ポエム）〟のコーナー（祈願神事編）で〈鬼子母神〉が放送される。 6月30日、同右番組の同コーナーで〈ぼくという旅人〉が放送される。 12月4日～5年3月7日、盛岡市先人記念館で〝盛岡・詩歌の人々―その情熱と精華〟展が開かれ、村上昭夫を紹介。
平成5年 一九九三	10月11日、『動物哀歌』新装再版（動物哀歌の会刊・盛岡市西青山一丁目八番地一一・村上達夫方／年譜付、新たに〈女が裸になる前に〉一篇を加え、一九六篇収録。初版から三度目の再版）

平成6年
一九九四

10月29日～11月27日、岩手県詩人クラブ結成四〇周年記念〝岩手の詩展〟が日本現代詩歌文学館で開かれ、村上昭夫を紹介。
10月30日、岩手県詩人クラブより先達詩人感謝状が故人として昭夫に贈られ、北上市のワシントンホテルにて行われた贈呈式にふさ子夫人が出席。

平成7年
一九九五

3月18日、前橋市の劇団円形舞台が〝詩劇・こおろぎのいる部屋〟（原作・村上昭夫『動物哀歌』、ソポクレス『コロノスのオイディプス』）を公演。

平成8年
一九九六

平成9年
一九九七

3月16日、陸前高田市の下矢作（しもやはぎ）公民館で〝ふるさとの先人に学ぶ〟講演会が催され、高橋昭八郎が〝村上昭夫・人と作品〟と題して講演。
10月10日～11月9日、日本現代詩歌文学館で特別企画展「没後二〇年　村上昭夫『動物哀歌』への道」開催（企画委員／相沢史郎、伊藤元之、内川吉男、北畑光男、小森一民、佐藤章、高橋昭八郎）。開会日にはオープニングイベントとして北畑光男が〈今を生きる詩―「動物哀歌」の宇宙〉と題して講演、また林芳輝作曲によるピアノ曲〈前奏曲Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ〉、歌曲〈遠い道〉〈雪〉〈秋〉が演奏される（ピアノ・高橋珠子／メゾソプラノ・荻原美智子）。